

20 世紀初頭フランス・ファッションの変容  
— 異国趣味、身体およびパターン、装飾 —  
French Fashion Movements in the early 20<sup>th</sup> Century  
— Exoticism, Body & Patterns, Ornaments —

滝澤 愛<sup>\*1+</sup> , 円谷 智子<sup>\*2+</sup> , 佐藤 恭子<sup>\*3+</sup>  
Ai Takizawa<sup>\*1+</sup> , Satoko Tsumuraya<sup>\*2+</sup> , and Kyoko Sato<sup>\*3+</sup>

\*1 和洋女子大学 家政学群服飾造形学類 千葉県市川市国府台 2-3-1

Department of costume and art, Wayo Women's University,  
2-3-1 Konodai, Ichikawa, Chiba Pref. Japan

\*2 服飾染織研究家

Independent Scholar

\*3 日本女子大学大学院 人間生活学研究科博士課程後期

Doctoral course, Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University

<sup>+</sup>服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The basic source material used in this study is women's magazines incorporating tailoring patterns published with the target set on middle-class French women at the start of the 20<sup>th</sup> century. Adopting two approaches, namely the cultural history of costume and study of the structure of costume, we have examined the relationship between costume and physical changes. From the standpoint of the structure of costume, we have analysed the numerical values that appear in the body size charts used at the time when placing an order for the production of a particular pattern along with the pattern cuttings. I thereby discovered changes in physique centring especially on the waist and an increase in the amount of leeway afforded by the costumes. From the standpoint of cultural history in connection with costume, we studied design silhouettes and ornamentation on the basis of prints and photographs of models featured in the magazines and also on the basis of fashion-related magazine articles. This enabled us to ascertain the process whereby middle-class women became aware of trends in haute couture through the medium of fashion news columns and were able to imitate these trends through use of the models and attachments featured in the magazines. The move towards flat, leisurely silhouettes incorporating exotic costume features also became evident. One can observe how clothing adapted to stylistic change through the use of motifs and colouring. The magazines at the same time presented simple and easily mastered materials and techniques and ideas for renovation taking account of household budgets and lifestyles.

---

\*1) takizawa@wayo.ac.jp

**要旨:**本研究では、20 世紀初頭にフランスで中流階級の女性を対象に出版されたパターン(型紙)付録つき婦人雑誌を基礎資料とし、服飾文化史と衣服構成学の双方から服飾と身体変化の関係について考察を行った。衣服構成学的見地からパターン製作に使用されたボディのサイズ表の数値やパターンのカッティングを分析した結果、ウエストを中心とした体型変化や衣服のゆとり量の増加が確認できた。服飾文化史の見地から雑誌掲載モデルの版画や写真資料、ファッション関連記事に基づきシルエットや装飾について検討した結果、ファッション通信欄を通して中流階級女性達がオートクチュールの動向を知り、掲載モデルや付録を利用して模倣する過程が把握できた。異国趣味の服飾要素を取り入れながら平面的でゆったりとしたシルエットへの移行が掲載モデルにも認められた。装飾はモチーフや配色で様式変化に対応しつつ、家計や生活スタイルを考慮したシンプルで扱い易い素材や技法、リフォームが紹介された。

### 配当決定額

平成 23 年度	500,000 円
平成 24 年度	500,000 円
合計	1,000,000 円

### 研究の目的

20 世紀初頭における女性身体のコルセットからの解放は西洋服飾史上の革新として扱われ、当時のクチュリエ達が発表した異国趣味ファッションの流行がその一因と考えられている。従来の服飾史研究では著名なクチュリエ達によって上流階級の特定の女性のために製作されたオートクチュール作品研究が中心とされてきたが、本研究では、当時のフランス消費経済の中心を担っていた中流階級の女性達に広く購読されたパターン付録つき婦人雑誌を基礎資料に定め、中流階級ファッションにおけるオートクチュールの受容に注目することにした。

とりわけ雑誌付録パターンを研究対象に加えることで、西洋服飾史で指摘される異国趣味や東洋趣味デザインの流行が衣服構成及び身体へ与えた影響、すなわち西洋的な曲線・立体構成から東洋的な直線・平面構成への推移やゆとりの問題について、服飾史的アプローチのみならず衣服構成学的アプローチからも検証することを目的とした。

### 研究の方法

フランスで出版された中流階級向けパターン付録つき婦人雑誌 *La Mode pratique* (1891-1938) を基礎資料に選定し、研究期間を 1900 年前後から 1920 年代までとした。構成学的アプローチでは、閲覧可能な付録の実寸大パターンの複製作業から行った。パターン製作に用いられたボディの変遷から女性の体型変化を考察し、さらに各年代の特徴的デザインのパターンを CAD で抽出し、カッティングの分析を行った。服飾史的アプローチでは、*La Mode pratique* の他にクチュリエの最新モデルを扱う上流階級向け雑誌も使用し、掲載モデルなど図像資料(版画や写真)、ファッション関連記事に基づいた視覚的シルエットと装飾の変遷について、衣服構成の変化と関連付けた考察を試みた。

## 研究の実施計画

[23 年度]

文化学園図書館とパリ市立フォルネ図書館、フランス国立図書館、装飾美術館図書館にて、20 世紀初頭にフランスで出版された中流階級向けパターン付録つき婦人雑誌の所在調査を行う。パターンの現存状況、雑誌の発行部数や期間などを熟慮し、複数の候補誌の中から最終的に *La Mode pratique* (週刊誌、年間 52 号発行) を基礎資料として選定する。

構成学的アプローチとして、パリ市立フォルネ図書館に所蔵される雑誌付録パターンコレクションを調査し、研究対象期間に出版された *La Mode pratique* の付録実物大(トレース状およびカット状)パターンを写真撮影により縮小複製収集を行う。*La Mode pratique* 誌が独自で行っていたパターンや既製服の製作・通信販売サービスのページに掲載されている、パターン製作用ボディのサイズ表の数値分析からサイズ規格や体型変化の変遷を考察を試みる。

服飾史的アプローチとして、パリ市立フォルネ図書館、フランス国立図書館、装飾美術館図書館にて *La Mode pratique* の版画や写真など画像資料、ファッション関連記事の収集を行う。文化学園図書館に所蔵されるクチュリエ達の最新モデルを写真や彩色版画で掲載した上流階級向け雑誌 *Journal des dames et des modes*、*Gazette du bon ton* 等を精査し、異国趣味ファッションにみられる視覚的シルエットについて検討する。

[24 年度]

雑誌研究として、この時期にパターン付録つき婦人雑誌が数多くの出版された背景を考察する。この種の雑誌出版の意図や普及状況について、フランスの国立文書館、現代出版資料研究所 (IMEC) にて *La Mode illustrée* (1860-1937) と *La Mode pratique* (1891-1938) 関連の出版史料を調査する。

構成学的アプローチとして、昨年フランスで収集した雑誌付録パターンの中から年代ごとに特徴的なデザインを選定して CAD でパターンを抽出し、身頃や袖などパーツごと、並びにダーツやアームホールなど要所ごとにカッティングを分析する。ストックマン社、フランス繊維衣料技術研究所 IFTH、パリ市立モード博物館衣装保管室にて身体測定法、サイズ規格、ボディの変遷と現状に関する聞き取り調査を行う。フォルネ図書館でボディ製造業者の商業カタログを調査する。

服飾史的アプローチとして、*La Mode pratique* の主に掲載モデルの版画や写真資料、ファッション関連記事の収集を続行しながら、視覚的シルエットと装飾の 2 つの側面から資料の整理、分析を行う。フランス、ルーベ芸術・工業美術館のテキスタイル資料室でフランス北部で 19 世紀後半から 20 世紀初頭に生産されたテキスタイルの見本帳を調査する。

8 月開催の第 25 回国際服飾学会において経過発表としてポスター発表を行う。

## 研究の成果

【パターン付録つき雑誌研究】

[23 年度]

東京とパリでのパターン付録つき婦人雑誌の所在調査から、雑誌綴じ込み付録パターンに文化財としての価値を見出し、雑誌と別個に体系的な収集、分類、保存を行う図書館は稀有であり、パリ市立フォルネ図書館では「雑誌付録パターンコレクション」として 1870 年代から 1980 年代のパターンを約 1600 件以上所蔵していることが明らかになった。この内 *La Mode pratique* のパターンは創刊年 1891 年から調査対

象である1920年代終わりまでに、のべ2716件を占め、とりわけ1915年までは空隙年代も少なく、最も充実していた。

[24年度]

20世紀初頭のフランスにおけるパターン付録つき婦人雑誌の出版背景を調査した。『1900年パリ万国博覧会報告書』によると、国内外のファッション誌は第13グループ「糸、生地、衣服」内で展示、審査された。博覧会審査員はこれらを読者層により職業向けと家庭向けに分類し、家庭で経済的に衣服を製作したいと望む女性達のパターン需要の高まりと合致した後者の飛躍的發展に注目した。中でもDidot社の*La Mode illustrée*とHachette社の*La Mode pratique*を有力誌として扱った。

フランス国立文書館、現代出版の記憶協会(IMEC)にて前述2社の会社史料を調査した結果、1890年代頃、多数誌が競合する中で読者を獲得するため、雑誌を通じてのパターンや衣服の既成サイズまたはオーダーメイド製作販売、生活雑貨の通信販売、付録の多様化など、記事以外の実用的付加価値の提供が試行錯誤されていたことが読み取れた。*La Mode pratique*編集長、Caroline de Broutelles(1865-194?)は、Hachette社経営陣から*La Mode pratique*創刊を皮切りに1930年代まで複数の女性誌の指揮を約半世紀に渡り一任され、女流ジャーナリスト、ファッション評論家として各界と交流を持った人物であったことが明らかになった。

## 【衣服構成学的研究】

### 1) サイズ表に関して

[23年度]

文化学園図書館所蔵の*La Mode Pratique*は数が限られ、また付録の実物大パターンが残っていないものも多かった。そこで、1900年～1930年代までの間で、フランス国立図書館、フォルネ図書館において、閲覧可能なすべての冊子と付録パターンを調査し実際にあたった。1年目には冊子中において、パターン・オーダーに関連した記載が有る際に度々併せて表記されていたサイズ表に注目し、検討、分析を行った。このサイズ表に関しては1901年1月から1928年1月に発刊されたものを使用した。具体的にはサイズ展開の時代毎の流れを可視化するためにグラフに置き換えた。また、ウエストに対するバストとヒップの比率の年代による変化を捉える為、それらの比率もグラフにした。その結果、時代によってバストやヒップの数値は小刻みに上下を繰り返し、30年の年代を超えて大差がなかったのに対し、他方、ウエストにおいては時代を追う毎に徐々に大きくなっていく。また、とりわけ変化が顕著であったのはサイズ48号のみ1913年1月18日号から1915年10月16日号にかけて、そしてその他の号数に関しては1917年11月10日号から1920年7月17日にかけて劇的にウエストの寸法が大きくなり、女性の体型変化が示された。

### 2) パターンにおける変化

[23年度]

次にパターンにおける研究であるが、先述の通り、*La Mode Pratique*の付録型紙について、フランスで現存している物を全て調査し写真による採集を行った。また、採集の際には、三脚を使い、真上から出来る限り水平の状態撮影を行ったが、5センチ刻みに格子状に線を引いた紙の上にパターンを置いて撮影することにより、少しの歪みも後に修正して正確なパターンを再現できるようにした。パターン全体を撮影した枚数は1785枚、年代を1900年から1929年に絞って数えると総パターン数は1491に上った。その内訳

は婦人服のコルセット、コルサージュやジャケット、コートなどといった一般的に着用するアイテムの他に子供服なども多く含まれていた。

[24年度]

数あるアイテムの中で今回はコルサージュに絞り、その年代ごとのパターンの変化を辿り、分析を行った。その結果、当然ではあるが、サイズ表のウエスト寸法がどんどん大きくなっていくのに連動し、ダーツ分量が少なくなり、脇のラインや前中心等が直線的なカッティングへと変化していき、服のシルエットもゆったりとゆとりを含むものへと変化していくことがパターン上にも明確に表れていた。

### 3) ボディ(マネキン)の変化

[23年度、24年度]

フォルネイ図書館とフランス国立図書館に現存するボディやマネキンのカタログ資料を調査し、その時代毎の女性の体型とシルエットの変化を捉えた。ボディについてはLANQTRY社、STOCKMAN社、マネキンはPIERRE IMANS社のカタログが主要資料である。その結果、衣服パターンを作成するボディも服を展示するマネキンも、年代が新しくなるとウエストの極端なくびれはなくなり、腹部は自然な状態になる事が示された。特に1920年代に入るとPIERRE IMANS社発行のカタログに掲載されているマネキン至っては、それまでに見られなかった、下腹部に脂肪がつき、ふくよかな女性の自然な腹部の状態を表現したマネキンが制作されていることが見て取れ、女性の間にはウエスト矯正のためのコルセットが使用されなくなってきた事を窺わせる例を確認する事ができた。

## 【服飾文化史的研究】

### 1) 視覚的シルエット 異国趣味

[23年度]

20世紀初頭、パリの流行が上流階級を中心に作り出されていた一方で、*La Mode pratique*のような比較的大衆向けに刊行された女性誌にデザイン等のモードの主流がどの程度広がり、反映されていたのかを探るため、当該年度は周辺のモード誌の中でも上流向けとされた雑誌を中心に主流となるシルエットの変遷とこの時代のモードの特徴でもある異国趣味ファッションについて調査した。異国趣味ファッションは、現代モードにつながる服飾変革の一端を担っている。前世紀末から続く、文化面での多国籍かつ折衷様式の嗜好と自由な気風のもと、服飾においても東洋の衣服への関心や、バレエ・リュスの影響などから、ポワレをはじめとするグランクチュリエが斬新なデザインを発表し、前衛的シルエットや装飾が誕生していった。モード誌にみる1900年代はまだ、テーラードカラー、S字型をなすドレスなどベル・エポック全盛期のスタイルをそのまま引き継いでいた。1907年、ポワレはゆとりある平面的な東洋趣味コートを発表しているが、*Femina* などにおいても、1910年を前にして、ディレクトワールスタイルやホブルスカートなどのストレートなシルエットの流行の掲載が既にはじまっていた。*Journal des dames et des modes*のファッションプレートにおいては、戦前までの1912年から1914年までの約3年間という短い発行年の間、大半が平面的ストレートなシルエットで占められている。また、*Journal des dames et des modes*に加え*Gazette du Bon ton*など上流階級向け雑誌のファッションプレートは、1910年代に入ってから第一次世界大戦前までに異国趣味の要素が色濃く見られる。異国趣味スタイルは、キモノ袖や、東洋風コートなど従来とは異なる広がりをおさえたドレスになっており、モチーフや色彩の上でも、パリの外からの影響が見られる。またこのスタイルのゆと

りあるストレートなシルエットは、日本や中国の他、現在の西アジア地方のカッティングの影響を受けてのことである。これらの異国趣味ファッションは、やはりこのころ人気のあった古代風や中世風などの時代の異なる衣服の影響を受けたスタイルとあわせて、仮装パーティの衣装として活躍した。当時、上流階級を中心に流行した仮装パーティや舞台鑑賞の場でこれらのファッションが着用されることで流行への拍車をかけていった。これらが、のちの第一次世界大戦後、活動女性を支える平面的ゆとりのあるドレスの定着へとつながっていく。

[24年度]

前年度の上中流階級向け雑誌をもとにしたモードの変遷研究により、とりわけ1910年前後において、異国趣味的要素を持つスタイルが多数みられたことがわかった。当該年度は、実用的志向の強い*La Mode pratique*の1900年から1919年までを重点的にこれらについて取り扱われた様子の考察を行った。同誌のイラストや写真によるシルエットの変遷は、1900年代では、コルセットでしっかりと締め付けた細身かつ曲線美をもったシルエットのローブの上にゆとりを多く含む東洋風コートを羽織る組み合わせが見られた。1910年を前にして、クレープ、モスリン、カシミアなどの柔らかい素材で作られた第一帝政期、あるいは古代ギリシャ風ローブの流行や日本風の自然な肩ラインのきもの袖など、ゆったりとしたラインへの移行がみられた。1910年代半ば以降は、凹凸のない平面的かつ直線的なシルエットのローブが全盛を迎えている。これらの流れは、上流階級の流行をほぼ追う形となっている。*La Mode pratique*には、等身大の流行を知るファッション通信欄や自分で製作できる実用的なファッションについてだけでなく、上流階級誌と共通の差し込みイラストや写真など、オートクチュールの動向を知るための情報が入っており、読者は常に流行の先端を察知することができていたと想定できる。

## 2) 装飾

[23年度]

中流階級向けパターン付録つき婦人雑誌 *La Mode pratique* のファッション関連記事における衣服装飾の扱われ方について検討し、衣服の審美的側面や造形的側面のみならず経済的側面も装飾は担っているという結果が得られた。

西洋服飾における装飾には *ornements* や料理の付け合せをも意味する *garnitures* というフランス語が用いられ、衣服本体に後から付け加えるもの、衣服に構造的影響を与えない審美的で贅沢な付加価値という意味合いが強い。実用性や経済性志向の雑誌の中で、省略や代替が可能な部分であるが故に経済的負担を抑えて家庭で気軽に施すことができる装飾は、ファッションの変化に敏感な中流階級女性達の救済術として頻繁に取り上げられた。造花、リボン、レース、裾飾り、飾り紐、ボタン、刺繍など各種装飾方法に関する特集記事が度々組まれており、多種多様な素材の描写と値段は無論、材料の選択基準や代用品、製作時間にも言及され、より簡素化、簡略化するための創意工夫のノウハウが紹介された。刺繍パターン付録の提供もこれに貢献していた。

[24年度]

*La Mode pratique* 掲載モデルの図像資料やファッション関連記事から衣服装飾の造形的側面を時系列的に検討した結果、芸術潮流やパリメゾンの動向に追従しつつ、その受容の際に観察待機、取捨選択や修正が行われること、装飾方法は衣服構成と共に変化することが確認できた。

1900年代前半では、ロココ調のバルテル色薄地ドレスやブラウスの豊富なレース使い、ジャケットやスカート飾り紐によるトリミングやアール・ヌーボー調の曲線ライン・アラベスク柄、同様柄のレース地の飾り

襟やギンプ、バラなど流行花の布製造花や花柄が認められた。

1900年代後半から徐々にハイウエスト化と没ウエスト化が始まり、上半身と下半身を繋ぐ縦方向を強調する飾り紐やエプロン状飾り布、裾飾りに代わるチュニック風 2、3 枚重ねスカートが出現する。ジャケットやドレスの襟ぐり、折り返し襟、袖口などの部分刺繍や無装飾のスカートが浸透する一方で、小紋を民俗調に刺繍したチュールや平紐使い、大小様々な曲線的モチーフを飾り紐で構成するアプリーケ刺繍は単調な布地に立体感とアクセントを与えた。

1910年前後にスカートの裾幅が激減し、鞘型チュニックスタイルが定着すると、チュニックの長方形の面を意識した色柄地使いや大柄の配置、プリーツ、ドレープ、フレアーの立体感によって、アンダースカートとのコントラストが追求された。1912年から1913年頃、フォビズム調の大胆な柄と鮮やかな配色、ラメ使いを意識したコクーンコートが様々な素材、技法、色調で解釈された。

第一次世界大戦中、暗色、無地、無装飾のスーツやジャンパースカートにブラウスの組合せが好まれ、ブラウスの装飾が充実する。ツートンカラーやプリーツなど地布を生かした加飾方法にも変化が見られた。スカートが戦前の鞘型から 1915-1916 年に末広がり釣鐘型フレアー、1917年には裾幅を抑えつつプリーツやドレープで左右に立体感を残した樽型、貝殻型を経て寸胴で直線的形態に向うと、締付けの少ない広幅のベルトや大きめのポケットに装飾的效果が生まれた。

戦後 1920年代に入ると直線裁断、ローウエスト化が進行し、地布と柄物方形布のツートン使いによるウエスト切替えや幾何学的パッチワークが多用された。ノーカラーやVネックには、飾り襟やギンプに代わって、エスニックやアールデコ調のプリントスカーフやエシャルプが巻かれた。

## 主な発表論文等

[学会発表]

滝澤愛、佐藤恭子、円谷智子：「20世紀初頭フランス・ファッションの変容－異国趣味、身体およびパターン、装飾－」第25回国際服飾学会 (2012)